

## 10月の窓

実りの秋となり、山形市郊外でも、9月下旬には稲刈りが見られるようになりました。私が子どもの頃、狭い田んぼでしたが、祖父と祖母が稲作をしていました。田植えから稲刈りまで、もちろんすべて手作業です。稲刈りの時には、稲の穂を乾かすために木などを組んだものに掛けていくのですが、3～4段の高いところに祖母が登り、祖父が刈った稲を放り投げると見事に受けとって掛けていくのでした。子どもながらに、うまいなと感心したのを覚えています。この稲を干すための木組みのことを稲架（「はざ」、「はさ」、「いねかけ」）などと言うそうです。ただし、地域によって呼び名は少し異なり、タイプもいくつかあるそうです。

現在では、稲作のほとんどが機械化されており、今の子どもたちは、田植えや稲刈りを実際見ることもあまりないのだらうと思っていました。しかし、昨年私が勤務していた博物館で、驚いたことがありました。以下は、その時、博物館のホームページの「館長室だより」に書いた文章からの一部抜粋です。

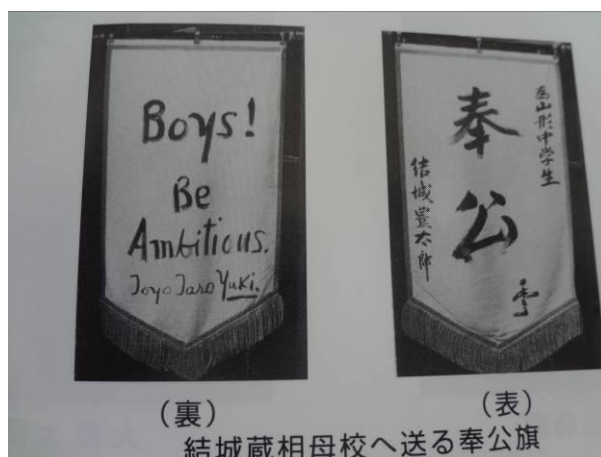
3年生の団体が、「昔の暮らし」に関する勉強の一環で、博物館が展示しているいろんな道具を見学していってくれました。ある小学校の児童は、農耕具を展示している所に来た時、「あ、唐箕だ。千歯もある。」と言って目を輝かせていました。私は毎日見ている農耕具ではありますが、正直その使い方もよく知りませんでした。どうして小学3年生が知っているのか不思議に思いたずねてみると、「米作りで使ったことがあります。」との返事でした。その後で引率の先生から、「1年間米づくりの勉強をしてきたグループなので、田植えから稲刈りまで体験してきたのです。」と教えていただきました。最初の写真が唐箕で、風を送って実の入った籾とそうでない籾を選別したり籾殻と玄米を選別したりする時に使います。次の写真が千歯です。細い鉄片が歯のように植え込まれ、稲の穂をしごいて籾を落とすのに使用します。



稲刈りを詠んだ俳句もたくさんあります。

よの中は 稲かる頃か 草の庵（いほ）……………芭蕉  
稲かれば 小草（をぐさ）に秋の 日の当る……………蕪村

「9月の窓」で、結城豊太郎先生の書などを紹介しましたが、結城先生の出身地の南陽市にある結城豊太郎記念館では、結城先生の数々の遺品や文化財等を展示しています。私も南陽高校に勤務していた頃から何度も行っておりますが、記念館の館長さんから「山形東高校にある結城先生関連のものを見せてほしい」との依頼がありました。南陽8ミリクラブというグループが毎年ビデオ教材を作っていて、今年は結城先生を取り上げ「ふるさとの偉人結城豊太郎 ふるさとは国の本なり」に取り組んでいるとのことで、本校にあるものを撮影させてほしいとのことでした。記念館の加藤館長には以前からお世話になっており、館長さんご自身も南陽8ミリクラブの一員とのことでしたので、9月上旬に来ていただきました。「9月の窓」で紹介した結城先生の書や「奉公旗」と呼ばれる旗も見ていただきました。ただ、この旗は保存状態が悪く広げることができない状態なので、保存しているままの状態に撮影していただきました。私も実物は初めて見ました。写真は、その時撮影した奉公旗裏側の上半分と「結城豊太郎先生遺芳録」に載っている奉公旗です。「結城豊太郎先生遺芳録」は、結城豊太郎先生遺徳顕彰会が結城先生の遺品資料を整理して発行した上下2巻からなる遺芳録で、平成16年に完成し、本校にも寄贈していただきました。



(裏) (表)  
結城蔵相母校へ送る奉公旗

秋はスポーツの秋でもあります。9月には、1・2年生が主体となって初めての公式大会となる村山地区総合体育大会がありました。団体種目だけに限っても、山岳部が男女とも1位に相当する最優秀賞で、サッカー、男子弓道、女子ハンドボール、女子卓球が2位、男子ソフトテニスとハンドボールが3位という成績でした。

10月から11月にかけて開催される県大会へ出場することになりますが、一足早く開催された陸上競技の県新人大会では、5種目で東北大会への出場権を得て、東北大会でも男子800メートルで3位などの成績を収めてきました。詳細は、本校ホームページ上の「山東通信」をごらんください。

9月28日から10月14日まで東京で開催される「スポーツ祭東京2013」に、本校から2名の先生と生徒が出場しました。少年男子テニス競技の監督として出場した那須祐介先生と、少年女子フェンシング競技のフルーレ団体メンバーとして出場した門脇璃子さんです。玄関横の校舎に飾られる懸垂幕も、夏の高校総体、総合文化祭、放送コンテストに続いて4つ目となりました。そして門脇さんが出場したフェンシングのフルーレで3位入賞といううれしいニュースが飛び込んできました。写真は、国体出場の懸垂幕と門脇さんの3位入賞の賞状です。



最後に、今月は校内にある芸術作品のうち彫刻を紹介します。

2階中央廊下に、ちょっと変わった彫刻があります。階段に腰をおろした男性の胸のところが中空になっている作品で、「旅を続ける男」という題がついています。写真では小さくてわかりにくいですが、胸のところにも階段があり、中空のところへと続いています。本校卒業生で、現代具象彫刻家として活躍している峯田義郎さんの作品です。峯田さんは、「高村光太郎大賞展」特別優秀賞や「白日展」内閣総理大臣賞など様々な賞を受賞され、多くの作品が日本各地の美術館で展示されています。本校にある「旅を続ける男」は、本校の平成7年度から10年度までの4つの卒業学年の皆さんから寄贈していただきました。

本校の卒業学年には、その学年にちなんだ名前がつけられていると以前書きましたが、峯田さんは昭和31年3月本校第6回の卒業で、この学年には「六翠会」と

いう名前がついています。六翠会のみなさんは、二年ごとに総会を開催するなど、さまざまな活動をしてこられました。今年喜寿を迎えるのを機に、最後の総会を開催して「六翠会」を解散することになったそうです。六翠会のみなさんは長い歴史を目に見える形で残すために、「記念誌 六翠会」を発行することとして、編集委員の方が定期的に本校に集まり、編集作業を続けてこられました。先日その記念誌が完成し、六翠会会長で本校元校長の木村宰先生が来られて、校長室と図書館へと二冊いただきました。最後の写真がその記念誌で、表紙は峯田義郎さんをお願いして描いてもらったとのことでした。六翠会という名称については、いつどういう意図で命名したのか明確な答えはないとのことですが、木村先生は次のように書いておられました。

**「翠」は、翡翠のような、草や葉の汚れのない、透明感のある青緑色。きっと「六回卒業の諸君。青春よ、永遠なれ」、いつまでも若々しくあれという、思いをこめた命名だったのだろうと、推測されます。**

